

社会的養護の新展開 9

— 続 施設の子どもは恵まれているのか —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

とある現職の施設職員から聞いた「施設の子どもは恵まれている」という言葉が、何度も筆者のなかでこだまする。そのときは、何が、どう恵まれているか、語り合う間がなかったが、何が恵まれているのだろうかと思ふ。確かに、サロン活動に来た公的機関の支援者と呼ばれる若者はリンゴの皮向きも、お茶を点てることもできなかったが、同年代の施設を退所した若者はいとも簡単にリンゴの皮向きができるし、お茶を点てることやその作法も心得ている。一般家庭では、身につけなかったこと、習わなかったことも施設では学ぶ機会がある。それは、施設では18歳で自活するときに備え身につけておかねばならないことだといわれる。したがって、生活力や生活技術については、確かに一般家庭で育った若者以上に身につけていることもある。だから「施設の子どもは恵まれている」のだろうか。三食栄養バランスを考えて食事を取り、お小遣いももらえるということだろうか。

永野(2017)はダーレンドルフのライフチャンス概念を用い、「オプション」と「リガチュア」というキーワードから、社会的養育のもとで育った若者の生活実態とデプリベーションについて量的、質的に丁寧分析している。ここでいう「オプション」とは簡単に言えば選択肢のことであるが、一般家庭と比べ、社会的養育が必要な子どもたちは、「オプション」が制限されたり、そもそもなかったりする。また「リガチュア」とは、つながりを意味するが、これもまた、脆弱であることが多い。永野の分析を見れば、明らかに一般家庭と比して、さまざまな選択肢の制限とつながりの希薄さが社会的養育を終えた若者についてまわる。そして永野はこの「オプション」と「リガチュア」の根っこに『生まれ』と『生きる』ことのゆらぎ、つまり「生の不安定さ」が横たわっており、その開放が重要だと指摘する。この自己存在のテーマは、社会的養育を終えた若者にとって人生のあらゆる局面で自問することになるだろう。

人は人との安定したつながり(ここでいう「リガチュア」)のなかで自己の存在を肯定していく。社会的養育を必要とする子どもは、最もベースとなる家族とのつながりの希薄さ、不安定さ、最も基本となる愛着の対象との信頼関係のゆらぎからくる自己存在のテーマに拘束される。この状況から脱し、人生物語をとらえなおすためには、「オプション」と「リガチュア」の保障が重要になる。

「アフターケア」とは支援をするものから見た状況に過ぎない。社会的養育を受けた若者は、社会のなかで「いま」を生きている。そこを支える人は「いま」とこれからの、若者の家族ではないが、長くお付き合いしていく関係性を作っていく必要がある。

京都中小企業家同友会の前川さんらは、施設を訪問し、子どもたちの適職探索、就労体験をサポートしておられる。前川さんは「一度、子どもたちにかかわったら一生かかわる」と言われていたが、この活動は使いモノになる人材を発掘するなどという浅はかな思いではなく、人と人との関係性のなかから、彼らが自己存在を肯定していくプロセスに沿った、まさに「オプション」と「リガチュア」の保障のひとつではないかと思う。前川さんは、私たちのやっていることは「支援」ではないと言い切る。法や制度のなかで動かざるを得ない支援者とは違って、「終結」はないというわけである。筆者も含め「支援者」と呼ばれる人は「支援ではない」と断言するこの前川さんらの活動から学ぶことが多いと思う。

京都中小企業家同友会の活動についての記事

朝日新聞デジタル

(ひと) 前川順さん 「中小企業力」で児童養護施設の子どもたちを支える

<https://www.asahi.com/articles/DA3S13786271.html>

